

ウクライナ凡人所感

池田昌博

黒川 祐次 著

物語 ウクライナの歴史

ヨーロッパ最後の大国

緊迫する
ウクライナ情勢を
知るための一冊

ロシアが影響下に置こうとするのはなぜか？

中公新書 1655 定価946円(10%税込)

物語 ウクライナの歴史

元ウクライナ大使 黒川祐次

- ▶ 古代からウクライナ独立までの歴史や文化をこの新書のなかにふんだんに伝えてくれる。ただし、流れは理解できて情報が多すぎて凡人の私にとっては難解なものとなる。
- ▶ 究極はウクライナ人とは、ウクライナ国とはなんであるかとなる。とにかく、肥沃な農地をかかえ東西の要衝であるがために国家を容易に持つことができず、母語を学び使うことができなかつたこともあつた。
- ▶ 中世以降だけでもロシア、ポーランド、スウェーデン、オーストリー、トルコ等との領土争奪戦、民族間の戦いは数知れない。
- ▶ ここに、ロシア革命や居住するユダヤ人が絡み、さらに宗教が加わる。国家を持たないウクライナの人々は心ならずも同一民族で銃を構えることもあつた。

→ ローマ教会は「反共」だけでなく「ギリシャ正教」への違和感から反ファシズムとはならずユダヤ人虐殺、独ソ線にも沈黙したのではないか。

ローマ教皇とナチス (文春新書) 新書 - 2004/2/22 大澤 武男 (著)

- ▶ 私たちにとってはウクライナは旧ソ連の一部であり、この地域のことは学ぶこともなく知ろうともしなかった。あの美しいウクライナのまちの多くもスターリンに徹底的に破壊されたという。歴史的な飢餓も旧ソ連の外貨獲得と無計画な農業の集団化の強要にあった。
- ▶ 民族自決が叫ばれたロシア革命時にも独立を試みたが、結局は旧ソ連だけでなく戦勝国にも無視され続け、苦肉の策なのか、一部がナチス側につきユダヤ人虐殺に関わることもあった。これがまたウクライナの不幸を招いている。（戦後、米国はこの勢力を免責し、CIAがこの勢力を利用したとの説もあるし、アゾフが存在する。）
- ▶ 「ウクライナ国民共和国」が、旧ソ連、第1次世界大戦の戦勝国に無視されたのは、この「国」の性格が社会民主的であり、これが、戦勝国にも嫌われたというのが黒川氏の見解。
- ▶ しかし、プーチンはレーニンがウクライナの存在を認めたこと自体を誤りと主張している。

広瀬 佳一 防衛大学校教授 ウクライナ侵攻 はNATO拡大のせいではない。FBから

- ▶ 1. そもそもNATO拡大は、加盟希望国が申請することによってのみプロセスが開始されてきた。
- ▶ = アメリカが一方的に決めたり実行してきたりしたわけではない。
- ▶ 2. 冷戦後の拡大の前に、NATOとロシアは基本議定書（1997年）という取り決めで、新規の加盟国には部隊を常駐させない、核も配備しないという約束をしている。
- ▶ = だから拡大によりロシアの近くにNATO軍が来るとか、核が置かれるとかいうのは根拠のない被害妄想か、ロシアのプロパガンダ。
- ▶ 3. そもそも国家がどの国際機構や地域機構に加わるかは、国家主権の問題。

- ▶ 4. 「ウクライナがNATOに入るだろう」という文言が入った2008年NATOブカレスト宣言がよく問題になるが、このときも独仏はロシアに配慮してウクライナが実際の加盟プロセスに移行することに反対したため加盟の展望は拓けないままだった。
- ▶ =プーチンがウクライナへのNATO拡大が脅威だと言うのは、独仏からすると「恩を仇で返された」感じ。
- ▶ 5. 2000年以降もNATOに入りたいという国が後をたたない理由の一つは、プーチンの威圧的な言動に脅威を感じるからであって、その意味ではNATO拡大の原因を作っているのはプーチン。
- ▶ =非同盟のフィンランドやスウェーデンが急速にNATO加盟に傾いているのは好例。
- ▶ =NATOを拡大させたのが悪いという人は、小国の外交・安全保障は、大国に決める権利があるという大国主義的発想になっていることを自覚すべきでは？
- ▶ 『「世界」臨時増刊・ウクライナ侵略戦争』（岩波書店）「NATO変貌とエスカレーション・リスク」参照とのこと。

知らなかったウクライナ

「ひまわり」の舞台

「花はどこへ行った」の原曲

花はどこへ行ったの作者ピート・シンガーは、ウクライナを舞台にしたショーロホフの著書、『静かなドン』の冒頭に出てくるウクライナ民謡からこの曲のヒントを得たという。

「赤い闇・スターリンの冷たい台地で」

ウクライナ飢餓を取材した英国人ジャーナリスト、29歳で変死

[映画『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』 | 2020年8月14日\(金\)全国公開！ \(akaiyami.com\)](#)

「跳人 ブフカ」

サルトルはハンガリー動乱でどう反応したか

- サルトルは当初ハンガリー労働者による反抗を単なる当自国政治の民主化の要求とみなしていたが、事態が混乱を極め、混迷を深めるに及び、そのmouvementは反革命であり、右傾化であると断ずるに至った。
- その後、「スターリンの亡霊」を書きソ連の軍事介入を批判するが、ソ連の非スターリン化過程の錯誤として全面的批判を留保する。サルトルは「仏ソ協会」を脱退するがソ連との関係を維持、60年から63年まで準国賓待遇でソ連訪問。

『ウクライナ・オン・ファイヤー』

『ウクライナ・オン・ファイヤー』（オリバーストーン）は2014年の親米派によるクーデターや、それ以前から引き続くウクライナを巡る欧米・ロシアの矛盾に迫り、なぜプーチンが今回の軍事行動に及んだのか、その動機やもう一方の側の主張を知り、視野を広げるうえでも観るべきドキュメンタリーと伝えられる。

https://www.youtube.com/watch?v=4U_IzVh_KDs

しかし、あくまでも視野を広めるためのものであり、今回のプーチンの暴挙を免罪するものではない。（池田）